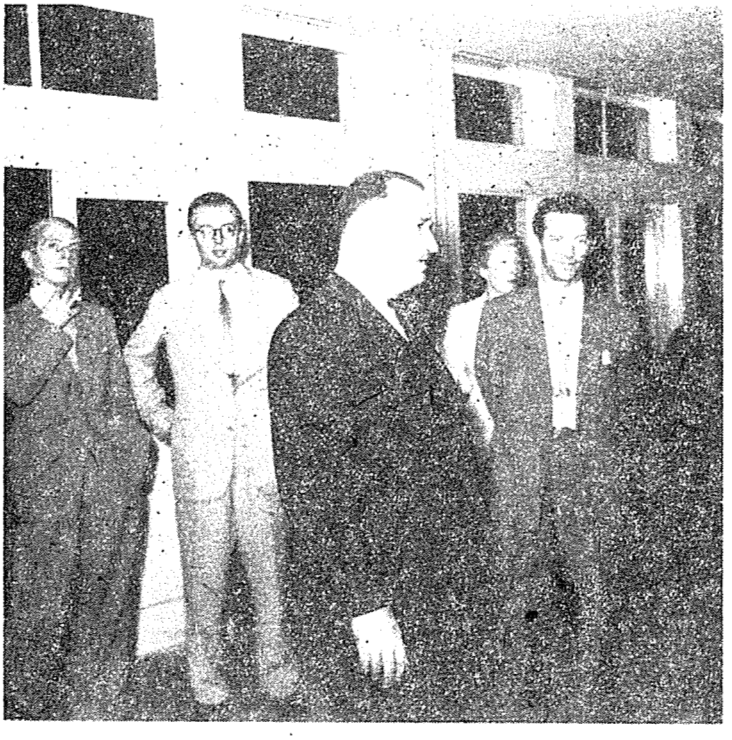
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, October 15th, 1952. —No. 252

關西大學學報

第 2 5 2 号

昭和27年10月



來學セラレタ駐日佛國大使

關西大學學報局

一握の種子

……経済学考古館の片隅にて……

澤村榮治

紀元前四世紀のことである。その頃までは全世界に王者の如き壯大さをもつて臨んだアテナイが、ペロポンネソスの戰に無慘な敗北を喫し、戰にやぶれた国のみじめさを痛切に味わされつゝあるときに、アテナイの出身でありながら亡命客となつていまは故国に容れられぬ軍人クセノブホーンの、故国復興のためによせたひとつの献策がいまにつたわつている。それは「アテナイ歳入論」とよばれる、その人の最後のエッセイであり、紀元前三五五年と推定される日附けをもつている。書き送られた先はアテナイ財務官エウブウロスあるいはその友人とみられているものである。

※

ギリシアが、その多様的統一をなしとげたのは数次にわたるペルシア戰役を通じてであり、その統一の中心的地位にあつたのはとりもなおさずつねにアテナイなのであつた。かくしてアテナイのギリシア世界、或は地中海世界における地位はまさしく光栄と盛大の極点にあつた。紀元前五世紀の中葉。

だが美しきものは色あせ、さかえるものはおとろえるとのことわりをまた免れえなかつたアテナイは、つねに拮抗し来つた強国スパルタとの戰にやぶれ、あまつさえ疫病の流行・国内政治の腐敗等あつて、ついにその海上帝国の偉容を失うに至つた。紀元前五世紀の末葉。

勿論その後、かなりに急速な立直りをしめしたアテナイは、依然ギリシア世界における商工業の中心的な位置を不完全ながらも占めることが出来、また従つてギリシヤ世界の指導的地位にある程度帰ることは出来たけれども、しかし往時の勢威にまで再び帰ることはついに夢であつた。その当時には、アテナイをしのぐ位置が、つねにいづれかの都市国家によつて占められておつたのである。紀元前四世紀の前半。

※

クセノブォーンは紀元前四三〇年頃にアテナイに生れ、軍人として、また歴史家としても活躍し、とりわけ紀元前四〇〇年頃の小アジアへの遠征隊に加わつた。その帰還における勇武と努力は、その著「アナバシス」によつて不朽となつたが、のちスパルタ王に味方したがために、祖国アテナイよりは追放せられた。しかし敵国スパルタよりはオリュムピア近傍に土地をおくられ、この土地においてその著「家政論」にみられるごとき田紳の生活が約二十年つゞけられる。紀元前三

第二五二号　目次

一握の種子……沢村　榮治（一）
ことばの動きと働き……井上吉次郎（四）
学内報……（五）
佛大使来学—臨時評議員会開催—免許法認定講習会終る—八鳥教授逝去—故八鳥教授追悼会—評議員選挙終る—計報—教授出張—学会開催—人事異動
校友……（六）
弁論部先輩会—千里山昭八会—森田森氏帰朝—二商法曹会
「ラ・フォンテーヌ寓話」の邦訳について……天野敬太郎（七）
学生……（一一）
コルトーに学ぶもの……T・M（一三）
大学図書館随想（その二）…大山　綱憲（一三）
編集後記

七一年エーリス人の侵入によつてレプレオンへのがれたが、この年また追放も免ぜられた。然し再びアテナイに帰らなかつた彼は、ついでコリントスに移り、こゝで、かつて燎乱と花ひらき、たぐいなく美しかつた花園アテナイの荒廃をながめて、その花園の復活を想望しつゝ、自らがあつめた、そして美しき花をつけうると信じたくさぐさの種子を、「アテナイ歳入論」を、祖国におくりとゞけたのである。紀元前三五五年のことである。けれども彼は、いうまでもなく花園が昔にかえるのをみえなかつたし、――それは昔にかえらなかつたからでもある。――また美しい花がそれぞれの種子から成長することをもみなかつた。――それはけつして採用されなかつたからでもある。――その後数年を出でずしてその地に逝いた。落日の祖国を異郷から眺めつゝ……紀元前三五四年のことである。

※

アテナイの国土、アッチカの地は、気候温和にして地味肥え、多種の農産・海産物を産し、穀物の生じぬ地域といえども鉱物の埋蔵量多く、多数の住民が依拠するにたるものであり、またその位置は、直接蛮族に接することなくて侵入の惧れ少く、海陸の交通上最適のところにある。かくアテナイが資源十分にして最良の地にあることは、アテナイをしてその窮乏と外国の猜疑から免れしめるをうる、とのべて、そのエッセイはじまるのである。

まづはアテナイに多数の外国人を誘致し、それにもとづいて公収入を増加させるべきであることがのべられる。外国人は国家より何物をもうけずに自活し、しかもその国家に対し大なる利益を与え、課せられた租税を支払うものであつて、最良の財源である。だから彼等はよりよく遇せられることが必要であり、このため、消極的には、国家に利益なくて彼等の名誉を傷けるような負担をのぞき、また重甲兵となる義務を免ずべきであり、積極的には、城壁内の空処をみたすためにも、家屋建築の申請者には、資格あれば土地取得の許可を與えるべきである。また更に、居留外人保護官を任命して多数外国人を誘致したものには褒賞を與えるがよく、この様にすれば外国人はアテナイ永住をも願うに至つて、国庫収入は増加することが期待せられる、という。

ついで貿易振興がとりあげられ、アテナイが商業・貿易上有利であるのはすぐれた外港ペイライエッスをもち、また優秀な貨幣（銀）を使用しているためである。だから貿易の発達を招来するためには、貿易に関するすべての訴訟に対して急速・公平の判決をなす商事裁判所の判事には褒賞を與えること、また多数の船舶・貨物をもたらしてアテナイに貢献した商人・船主に特殊な名誉を與え、市の饗宴に招待するべきである。かくてまた、多数の外国人がアテナイに移住・来訪して多量の貨物が流出入されるとそこに多額の所得が生ぜしめられ、従つて多額の貢税が収入せられるに至る。これらのために国家は何等の失費をも要しないで、寛仁な法制と周到な管理とがたゞ必要とせられるだけである。いうまでもなくこれらの収入増加策を実施するには基金が必要であろうが、従来軍備のために市民は重税を担い、前途の確実な見込なく多額の貨幣を費消して来たのであるから、いまこの様な計画のためにはむしろよろこんで貢納する筈である。具体的にいえば、船員のために港の周辺に、商人のために売買に便宜の場所に、また他のアテナイ訪問者のために適当な処に、公設旅館を増設する。ペイライエッス及びアテナイ市内に小売商人のため店舗を建て町の美観とともにその収入を増加せしめる。さらに国有商船を購入し、十分な保証を提供するものにこれを貸與する、などがあげられるが、市民がこれらの建設に出資するのは有利と安全という点から間違いないことである。けだし10ムナを出したものには約$\frac{1}{5}$が、5ムナを出したものには$\frac{1}{3}$以上がかえるからである。（ちなみに当時一年は360日とせられ、また1ムナは100ドラクメであつて$\frac{1}{60}$ターレントンである。さらに一日の利息は3オボロイと考えられている。なお1オボロスとは$\frac{1}{6}$ドラクメである。）かくては市民のみならず出資者は拡張せられて外国人一般に、他の都市や他国の君主・太守に及ぶであろう。なお外国人の出資については、アテナイに寄附行為を行つたものとしてその名を録し、永く後世につたえるべきである、

※

かくて次にその主張は銀鉱開発の問題とひきつゞいて国有奴隷の問題に移行する。（この一節はもつとも多くのスペースがとられ、きわめて重点をおかれているのであるが、後世の評者は実はこの点がもつとも妄想的で且つ可能性に乏しいとするのである。）こゝには二の重要な前提、乃至は確信が横たわつている。一

はアッチカの地は銀の埋蔵無限という確信であり、いま一は銀の価値は変動しないとの確信である。

さて、銀の生産が大いに行われてその供給が増加しても、他のいろんな財の如くにその価値が下り、その生産が不利となるようなことはない。けだし何人も銀の増加を希望しないほどに多量に所有したものはなく、また過剰に有してもこれを貯蔵することによつて使用の場合とかわらない満足をうるし、さらに銀の供給増加は需要増加をもたらすからである。こういう銀が無盡蔵に存在しているのであるから、これが正しく管理されると、他の部分の収入の他に、国家にとつてはそれは絶大な宝庫となりうる。いまゝでに採掘されたものは地下にある量に比して極めて小であり、また埋蔵地域も拡大されつゝあるから、いま多くの労働者が鉱山に作業していても、仕事はまだまだ多くあるわけである。従つて市民（事業家）は出来るかぎり採鉱事業を拡張すべきであるし、国家も銀鉱開発を奨励し、従来通り外国人にも市民等とし条件で許可してゆくべきであるが、新開発においては出来るだけ私人を事業の危険にさらさないように、たとえばアテナイの十種族にそれぞれ開発せしめてその結果は全種族に共同せしめるようにするべきである。同様にまた私人が一種の組合を組織してその運命を共同するのもよい。ともあれ公の事業と私の事業が互にその利益をそこなつたりする危惧は不要で、それらは同盟者の如くであつて、この無限の産業に従事するものが多ければ多いほどその収益は大となるものなのである。

さてこの銀鉱開発において労働者の多数が必要とせられる事情に応じ、国家は奴隷の国有をなしてその貸與による収入増加をはかるべきである。すなわちヒッポニコスは一人についてすべての費用をのぞき一日1オボロスの契約で600人を貸出し一日1ムナの純収入をえたのであるから、国家も同様な方法で一人のアテナイ人に対し三人の割合となるまで奴隷を国有し、他の国有財産同様に、相当の保証に対して此を貸出せば永続的収入を確保出来るのである。国有奴隷の借入れ側は勿論鉱山業者であり、前にのべたように作業の余地は大であるゆえ借入れは必至であるが、さらに他にも鉱山労働者の漸時の老衰という事情、また肉体労働を欲せずまた出来ない市民及び外国人の、管理人への転換という事情も考え併せることが出来よう、と。

さてこれらの方策の実施については必ずしも一齊なるを要しないで、むしろ一の方策の実施によつてえられた収入で次のものを行うという漸進的な順次的なやり方が最善で最易のものである。かくしてこの様な方策が十分に実施せられるならば、おそらくアテナイはたゞに富裕たりうるのみならず市民の性質も、社会組織もまた軍事的効力もきわめて改良されるであろう、という。

のこる二項目は直接経済的な乃至財政的な方策ではなくして、ひとつは歳入維持・増加のために平和の必要なることの強調であり、他は、そして最後のものは諸方策よりもたらされる利益に関しての総括であるが、そこではアテナイの復興……その繁栄と平和がこの方策の採用によつて招来されるであろうことがつよくのべられているのである。復古的色彩の濃さをしめしながら……。

※

まことに断片的な紹介ではあるが、これが「アテナイ歳入論」のあらすじなのである。クセノブォーンのアテナイ復興への熱情とこの献策についてのつよい自信にもかゝわらず、これらは偶然の一致による一二をのぞいては採用せられることなく了つた。彼が花園を往時の絢爛さにかえそうとしてとゝのえた一握の種子は遂に土に落ちることがなかつたのである。事実上花園はその美しさを二度ととりかえしはしなかつたのではあるけれども、もしこの種子がまかれたならば、それは大輪の花をもち、妍を競うて花園にその美しさをよみがえらせたであろうか。まさに歴史的検証をへなかつた政策について、いまは何ほどのこともいわないのがよいようではあるけれども、否ということばをおさええないおもいでもある。

ともあれクセノブォーンのまづこの種子にこめた願いは、それが祖国アテナイという花園にまかれ、成長し、花ひらかんことであつたろう。だが一握の種子は土にあうことなく、種子のまゝに二千年余の歳月を閲みして来た。そしていまは、経済学の考古館の一室に、その片隅に塵にまみれ、うすい日射しに、たゞ好事家のおとなうのをまつている。クセノブォーンの願つたものとはちがつた意味で、ひとつの大きい意義をもつているとはいえるであろうけれども、一握の種子のさだめはまたかなしいともおもえるのである。

（経済学部教授）

ことばの動きと働き

井上吉次郎

ラジオの放送に、いろんな人物が出てさまざまなことばで語るのを毎度面白く聽く。ラジオで無くては得られぬ興味である。三木武夫の言葉遣いなんか全く現代離れしてる。お菓子をオクワシ、火事をクワジという調子だ。恐らくは、この「辺鄙からの紳士」は、土地に残存する発音の子供の時に染み付いたのが抜けないのであろう。勿論、それが正しいことばであるといわれれば一言もない。ただ淡路の隅にでも行かなければ、その正しいことは遣いを大方のものがやらないだけだ。

しかし三木氏のは耳障りだというだけで、そして耳障りということは蘆峰先生のような老大家のお話を聽いても相手が感じれば致方がないのであるから、これは三木武夫のデリメットにならない

勝間田清一の場合は全く違う。破防法論議が盛んだつた折、放送討論会で、勝間田がしきりに、「キョシュン」ということばを使う。

一度や二度でない。はじめわからなかつたが、キョシュン・センドゥといつたので、教唆のことと知つた。これは少し意外だつた。左派仲間の学者と我も人も許してる勝間田が、まさか教唆を教シュンと読むとは思わなんだ。教唆煽動なんて、法律用語としても決してうまいことばだと思わぬが、随分使いふるしてて交番のおまわりさんでも知つてる。勝間田君も書生の時から幾度となくぶつ付かつてるに違いない。それが、あの時、あの地位になるまで、教シュンで通つて来たことが不思議で仕方がない。

われわれが漢語仮名混り文の書記文化をはじめてから相当の年月かかつてるがわれわれの漢語の知識には、ところどころに盲点がある。それが、ひよんなところに出る。それに文化自体に妙な茶人好みがあつて、読み癖や慣わしを祕傳みたいに尊重する。まるでハイ・ハードルを通るように、読んだり話したりの途中、その試練に引かかる。JOBKの婦人アナウンサーが、「近藤重蔵の家政イシ」といつた。この婦人も貿易を貿イとはいうまいから、そして容易を容エキというまいから、国語の変な好みにぶつ付かつた次第だつた。この婦人が、その前、摩耶ブニン（夫人）と見上げた読み方してた。水準以上に違いないが、時に盲点が暴露するのであろう。余ほど前だが、某新聞の写真説明に「東寺の山水の屏風」とあつた。センズイ屏風を知らないとて無論新聞編集者の常識を問うべきわけでない。

これは、そう古い話ではないが、古島一雄が死ぬ少し前に大宅壯一と対談した筆記が某誌に出てた。古島翁が「近頃の政党が明党的だ」といつたのを大宅が「放漫的だ」と受取つて、トンチンカンになつてたところがあつた。大宅も旧制の大学出身であるし、話の泉式知識はある方だから、明党を知らぬはずなし、けれども例の盲点だつたか、或は校正子の悪勘ぐりからか。折があつたら大宅壯三に話の泉ででも「比周」という問題を出してみたいと思う。

盲点といえば、むかしは重箱読みを笑つたが、この頃は、一語の熟字の中で、簡単なのを本字、面倒なのはカナで書くのが行われる。漢字制限の要請を受けつつ、古いかみしもを捨てかれた苦しまぎれの便法というんだろう。大阪で鈴木某という警視総監が世論の反対を無視して「巡邏」という字を使つた。仕方がないから新聞その他は「巡ら」と書いてる。

せめて「巡羅」ででもあれば本字で行けたんだが、巡羅では私服のお回りみたいで勿体が付かない。鈴木総監頑強に「巡邏」をいい張つた。それで「巡ら」成り下がつた。「巡ら」ではほだかのお回りさんみたいだ。第一ら字は前からあんまり人前に出さない慣行である。

江戸の町火消し「いろは四十八組」といわれたが、ら組とへ組はなかつた。かりそめにも芝で生れて神田で育つたと呼号するきおいの江戸ッ児が、への字のついた纏の下で消し口を争えぬという考え方からだ。「ら」も「へ」と同じ忌みことばだつた。消防が嫌つた「ら」字を「警察」活動の術語中に混ぜ込むことは、鈴木某の劃の多い字への憧憬の余波だつた。

さて勝間田君の盲点に戻つて、煽動が近時、扇動と劃を減らされた。これは鈴木流にいえば祠らない墮落だが、放つて置けば「せん動」になつてしまうから、自働車が自動車で我慢する故智を見習い扇動にした。ところで、真言の「不動護摩法」なんていうものは、随分やかましいもので、一々如法に形式を整えないと効果がない。火を付け、煽ぐにも、厄介な真言を唱え印を結びに至たり盡せりにやる。そういう勿体振つたものであるのにそこの用語は扇であつて煽でない。もつとも調伏の護摩にしても事が知れてる、二三子の仕事だ、今の扇動は世界革命に通ずる大きなことばだといえばいえるがだから煽動でなくちゃ破防法の用語に相応せぬという考え方は古いといわれるだろう。どうせ漢字を使う宿命にあるならこれを上手に使つて、或は便利に使つて盲点で笑われたりハードルに泣かされたりする人の負荷を少しでも軽くしたいもんだ。

（文学部教授）

學内報

佛大使來學

初の関西公式視察の為西下中の駐日仏大使モーリス・ドジャン氏は神戸駐在総領事ルボック・ド・フーラルド氏、在京仏大使館附文化部長アンリ・フロマン・ムーリス氏らを帯同、九月二十六日午後五時半、歴代大使の例にならい本学を訪問、宮島理事長、岡野学長及び教授らに迎えられ、新装なつた千里山学舎大学ホールに入り、大学院研究室、円形講堂に赴き、大使は研究室の構裝の美を激賞し、更に円形講堂ではソルボン又大学を思い出してなつかしがるなどつぶさに参観、後ホール階上サロンに休憩、一同夕食を共にし約二時間に亘り種々懇談を重ねた。午後八時半名残りを惜しみつゝ離学した。（写眞はホールにて懇談中の大使）

ドジャン大使挨拶

ドジャン大使はホール階上サロンの歓迎会会食に臨み、席上挨拶をかれて大略次の様な所感を述べた。

私は初めて公式に関西地方を視察したが、切りつめられたスケジュールに終始し、落付く暇さえなかつたが、今夕貴学の大規模な校地と立派な建物、更にこの静かな環境で始めて落付き得た。

貴学は今を去る七十年前、佛蘭西法を教える目的で建てられた事をかねて承つていた。今親しく訪う機会を得たのは幸せとする所である。殊に貴学には佛語を学ぶ者が多いと聞く。日佛文化の交流の爲にもよろこばしい事であり、今後益々御発展を望む。私は日本に多くの良き友を持つたが、今夜程家族的な雰囲氣を味わう事は初めてであると云つても過言ではないであろう。しかも、茲の食事は非常に美味い。これは私の国でいうコルドン・ブリュー（Cordon bleu：腕きゝの料理人）のお手並と拝察する。かれこれ誠に落付いて旅の疲れが充分に休まつた。未だ長く諸氏と話をしていたいが、これから京都へ引揚げなければならないことは誠に心残りである。最後に貴学の御多幸と御隆盛を祈つて止まない。

会食中話が元駐日大使ポール・クローデル氏の事に及び、理事長がクローデル氏もかつて本学を来訪された由を述べるとド大使は「クローデル氏が貴学へ…」と故国の大詩人を偲びつゝ感慨一入深げに窓越しに本学の夜景を見返るなど、和やかな一ときであつた。

臨時評議員会開催

八月二十一日午後三時より天六学舎に於いて開催、寄附行為第十四条第四号の規定による推薦評議員を決定した。

免許法認定講習会終る

七月十四日より開催された教育職員免許法認定講習会は、約四百の受講者が参加、所期の目的を挙げ、八月二十二日無事終了した。

八鳥教授逝去

関西大学教授文学部長評議員八鳥治一氏は九月一日吹田市千里山三一二の自宅で急逝されました。謹んで哀悼の意を表します。

同教授は昭和六年三月本学法文学部文学科英文学専攻を卒業、同年本学に奉職関西大学教授に累進、予科生徒主事、予科学生部長を歴任し終戦後文学部の創設と共に同部教授となり、昭和二十六年文学部長に推され現在に至つた。更に教授は評議員として本学の枢機に参劃、その他「アングリカ」「英学」等の英語学研究雑誌を主宰し、学界に於ける令名は夙に高く、特に当学報局の編集顧問として積極的な御協力を示され、故教授の手になる撮影作品は学報毎号の紙面を飾る等各方面に亘つて精力的な活躍をされた教授の急逝は、本学はじめ関係各界から惜まれている。

故八鳥教授近影

故八鳥教授追悼会

故八鳥教授の追悼会は、故教授にゆかり深い旧予科講堂（現経商学舎講堂）で九月二十四日午後一時より、遺族をはじめ本学教職員、同窓生、来賓、学生ら多数列席して挙行、岡野学長、進藤文学部次長及び学生代表の弔辞朗読あり、ついで故教授を偲ぶ各氏の追悼談に参会者の涙をさそつた。午後三時半終了散会。

評議員選挙終る

学校法人関西大学評議員選挙は、九月二十五日午後十二時を以て投票を締切り翌二十六日開票の結果先に決定した推薦

評議員を含む八十名が新に選出された。

訃報

石渡仁三殿（本学員外教授石渡俊一氏尊父）はかねて病氣療養中八月六日逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

教授出張

◇中谷敬壽教授は七月五日立命館大学で開催された学（総）長懇談会に出席

◇佐伯三郎教授は七月十九日神戸大学で開催された日本商業学会関西部会研究会に出席

◇河村宣介教授は九月二十日大阪市立大学で開催された日本商業会関西部会に出席

夏季見學旅行

安藤、末永、三上及び横田の各教授らは二部史学研究部学生二十数名と共に八月二十三・四両日に亘り、高野山の堂塔、寺寶古文書等の見学旅行を行つた。

研究發表講演会

佐伯三郎教授は九月二十日大阪市立大学に於いて文部省科学研究助成補助金による「大阪における繊維商社、問屋の実態調査」の報告を日本商業学会関西支部会で発表した。

人事

昭和二十七年六月三十日附

教授　富山忠三

任期満了に付本大学短期大学部学生部長を免する

昭和二十七年七月一日附

教授　角田文雄

本大学短期大学部学生部長に補する

昭和二十七年七月一日附

教授　佐伯三郎

本大学短期大学部教務主任を委嘱する

校友

校友六氏が當選

十月一日施行された衆議院議員選挙に於いて、左の校友六氏が当選した。（イロハ順）

大川　光三氏　大上　司氏
押谷　富三氏　田中　久雄氏
小林　絹治氏　北村徳太郎氏

辯論部先輩會

関西大学辯論部先輩有志による講演会が八月一日午後八時寝屋川市豊野保育園で開催された。尚今後も適宜開催の予定である由。当日の講師次の通り。

寺西武（大阪市議）伊藤保信（守口市議）門上敬夫（大阪輿論調査研究所長）桑原源太郎（関大理事）櫻本信雄（千里山學士會理事長）荒川虎一郎（寝屋川市議）

—荒川氏報—

千里山昭八会開催

八月二日（土）午後四時より舞子に於いて八月例会を開催、幹事より評議員選挙に関する決定事項を報告し、昭八会の態度を確定し之を推進する事に決議。次いで二十周年記念行事については幹事案の提出あつて一同承認可決実行に移すことになつた。議事後海水浴を兼ね一泊、一同打寛いで涼風を満喫しつゝ宴を開く。翌三日盡きぬ名残を惜しみつゝ散会。

当日の出席者次の通り。

山尾義赤　寳鳳貞三郎　中村重雄　中塚利國　浦野健二郎　廣瀬義臣　大島武夫　美吉克之助　野田文雄　前阪健吉　木下忠夫　一瀬義次　平井三朗　荒川虎一郎　岩田定一郎　多賀恒一　齊藤正興（順序不同）

—荒川氏報—

森田森氏歸朝

ロンドンで開催された第六回国際会計人会議に出席、兼ねて欧米各地を視察中の森田森氏は去る七月二十六日約一ケ月の旅程を終えパン・アメリカン機で無事帰国された。尚森田氏と同会出席の予定であつた長柄金吾氏は業界の國会対策責任者として渡欧を中止、同会議出席を断念された。

二商法曹会

本学附属第二商業学校は昭和二十年に第二十期生の卒業を最後に廃校となつたが同窓生の社会的活躍は目覚しいものがある。その一つとして二商出身判事検事辯護士で結成している二商法曹会は、去る六月二十八日二商五期卒業生の唐崎專彌君が経営の唐崎寮で懇親会が開かれた全国から十数名の出席を得て恩師四辻詮先生を囲んで思い出多い和やかな一夕が過された。尚ほこの法曹会員は実に三十名の多きを数え全国商業学校にその例を知らぬ盛観で二商魂を発揮された刻苦勉励の跡が窺える。

—長栖氏報—

二期　阿久根幸吉（辯）河村秀信（辯）河内雄三（辯）今井勝（辯）三期　岡田浜一（判）依田六郎（判）福國彦郎（辯）四期　塩見利夫（辯）福地耕三（判）五期　森健（辯）小川秀一（辯）竹内猛（検）辻木修（検）子原一夫（検）高橋文雄（判）八期　宮川仁（辯）九期　福山忠義（検）十期　山本久巳（判）山田光夫（検）十二期　後岡弘（判）日高良雄（辯）十三期　伊藤秀一（辯）田村錦夫（辯）十四期　鈴木芳一（検）倉橋泰雄（辯）大井亨（辯）十五期　小島信勝（検）森島忠三（検）中木照夫（辯）十六期　野村清芳（辯）

千里山昭八会開催

九月五日（金）午後五時半より大阪駅日本食堂特別室に於て九月例会を開催、幹事より評議員選挙の件及び二十週年記念行事計畫について経過報告あり、記念行事については更に二十五名の実行委員を挙げ強力推進を期した。当日新顔も次々に見えて懐旧談に花が咲き愉快な数刻であつた。午後八時半評議員推薦候補大島君の当選を期して協力を申合せて散会した。出席者左の通り。（敬称略、順序不同）

浅井三郎　田淵三郎　浦野健二郎　岡澤重郎　大島武夫　齊藤正興　宮地正一　寳鳳貞三郎　美吉克之助　中村重雄　山尾義赤　岡本健吉　橋本秀雄　一瀬義次　中山謙一　平井三朗　岩橋清　高橋新吉　筱原繁造　山下秀義　廣瀬義臣　筒井榮一　中塚利國　荒川虎一郎　森田隆三

—荒川氏報—

「ラ・フォンテーヌ寓話」の邦譯について

天野敬太郎

ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ(Jean de La Fontaine)は、十七世紀のフランス詩人であつて、ルイ十四世治下におけるフランス古典主義時代の代表者の一人である。彼は一六二一年七月七日(或は八日)、森林監督官を父として、シャンパーニュ州のシャトー・ティエリ(パリの東北東方五十八マイル)に生れ、一六九五年四月十三日パリーで死んだ。「フアーブル」(寓話)は一二巻からなり、約二百九十篇の話を詩で以て書かれたものである。第一輯は一六六八年に発表し、最終は一六九四年に出たのであるが、前後約三十年間書き續けたわけである。話の材料はイソップの寓話その他からとり、彼一流の方法によつて詩で表したのである。話の巻頭即も、巻一の第一話に「蟬と蟻」があるが、これはイソップによつたのであるけれども、古來問題となり、科学者フアーブルの如きは、蟬のために大いに弁明に努めた。フランスの子供は、幼い時からこの寓話を聞かされ、学校へ行くと本で読むからよく知つている。彼はこの寓話の外に「コント集」その他の著作を残している。

ラ・フォンテーヌの寓話集の邦訳は今日まで次に記す様に七種類出來ている。しかし全体の邦訳は未だ出版されていない。最も多くの話を訳したものは佐々木訳であつて、全巻に汎つて二二四話を収め、中村訳は巻一—七の全部(一四二話)を、梶訳は巻一—六の全部(一二四話)を、田中訳と平野訳は全篇(但し主として巻一—七)から選んで兒童用として平易に書き、田中訳は平假名で著わして八十八話を、平野訳は六十四話を收めている。市原訳は上巻に巻一—六の一二三話(巻六の最後の話を欠く)の最も忠実な訳であり下巻は未刊、初めの五書は散文訳であるのに対して、唯一の詩形式によつた訳である。この他に「こどもラフォンテイン」が出版されているが未だ見る機会がない。訳の一例として次に巻一の第二十話「雄鶏と眞珠」原文と六つの訳を掲げて対比の参考に供することにする。

Livre I, XX. Le Coq et la Perle

Un jour un coq détourna
Une perle qu'il donna
Au beau premier lapidaire.
"Je la crois fine, dit-il,
Mais le moindre grain de mil
Serait bien mieux mon affaire."
Un ignorant hérita
D'un manuscript qu'il porta
Chez son voisin le libraire.
"Je crois, dit-il, qu'il est bon;
Mais le moindre ducaton
Serait bien mieux mon affaire."

佐々木孝丸譯(鶏と眞珠)

或る一羽の鶏が、藁床の中から、一つの眞珠を轉がり出させました。鶏はそれを、無雑作に、最初に出会つた寶石商人に呉れてやりました。そして云ひました。『これは綺麗なものだと思ひますけれど、私には一粒の粟の方がずつと結構ですよ。』

或る無智な男が一つの原稿を相続しました。男はその原稿を近所の本屋へ持つて行つて云ひました。「これは立派なものだらうと思ひますけれども、私には一枚の銀貨の方がずつと結構ですよ。』

中村通介譯(雄鶏と眞珠)

或る日のこと、一羽の雄鶏が美しい眞珠を見つけた。だが、雄鶏はそれを惜し氣もなく寶石商人にやつてしまつた。」『なるほど見事な眞珠だが、しかし、この俺にとつては一粒の粟の方がよつぽど有難いよ』

一人の無智な男が立派な写本を贈られた。だが、彼はそれを惜し氣もなく隣の本屋へ手放してしまつた。『なるほど立派な写本だとは思ふが、しかし、この俺にとつては一枚の銀貨の方がよつぽど有難いよ』

梶耕吉譯(雄鶏と眞珠)

或る日のこと、眞珠を拾つた雄鶏は、それを、ゆきあたりばつたり、寶石商に渡してしまつた。「確かに見事な物だと思ひますが」と雄鶏は言つた『けれど私にとつては一粒の粟の方がまだしです』

或る無学な男が一冊の写本を贈られた。が、彼はそれを隣りの本屋に運んでしまつた『成程立派な本だと思ふが、この儂にとつては一枚の銀貨の方がまだましだ。』よ1」(註)(1)ノエドル

田中末廣譯(にわとりとしんじゅ)

ある日のこと、一わの おんどりがしんじゅを ひとつ みつけました。』『りつぱな ものだ とおもうけれども、あわつぶの ほうが わたしには もつとありがたい。』こういつて、おんどりは しんじゅを ほうせきの しようにんに やつてしまいました。」

ひとりの おろかな おとこが いました。おとうさんが しぬ とき、一さつの げんこう(原稿)を ざいさんとして、のこして くれました。」おとこはそれを となりの 本やに もつて いつてやつて、『けつこうな ものだと おもうけれども、五フランの おかねの ほうが わたしには ありがたい。』」といいました。

平野威馬雄譯(おんどりと眞珠)

ある日のこと……」一羽のおんどりが、うつくしい眞珠をみつけました。」おんどりは、それをいきなり手近かな寶石商人にやつてしまいました。』『さあ、この眞珠をあげましよう。これは美しい眞珠ですが、私にとつては一つぶの粟の方がよつぽどうれしいのでね。』」といいながら。」

一人の愚かな男が、親から立派な肉筆本をゆづられました。」かれはそれを、いきなりおとなりの本屋さんにやつてしまいました。」『「さあ、この肉筆本をあげましよう。」これはなかなか立派な本ですが、私にとつては一枚の銀貨の方がうれしいのでね。』」と、いいながら……

市原豐太郎譯(牡鶏と眞珠)

ある日「一羽の雄鶏が一珠を一顆」せゝり出し、たまたまそこに」來かかつた寶石商にくれてける。」『上等の品にちがひはなからうが」ほんの小粒の一粒の玉蜀黍が」俺の口には ずんと珍重』

無学の男が 遺産として」写本を一冊 讓られて、隣の 本屋に 持つて行きぬ、「『定めて立派なる本とは思へど」小さな銀貨一枚が」ずんと 拙者に性に合ふ』

(次頁下段へ)

佐々木孝丸訳　ラ・フォンテーヌ寓話集（世界童話大系第九巻の中）　世界童話大系刊行会　大正一五

近藤宗男編　こどもラ・フォンテーヌ寓話　イデア書院　昭和二

中村通介訳　ラ・フォンテーヌ寓話　上　肇書房　昭和一七

梶耕吉訳　ラ・フォンテーヌ寓話集　好江書房　昭和二三

田中末広訳　ラ・フォンテーヌ童話　玉川大学出版部　昭和二三

平野威馬雄訳　ラ・フォンテーヌ童話集　お猿の裁判官　福村書店　昭和二五

市原豊太訳　ラ・フォンテーヌ寓話　上　白水社　昭和二六

話の題名	佐々木	中村	梶	田中	平野	市原
イソップの生涯……	○	×	×	×	×	×
序言……	×	○	○	×	×	×
ドーファン殿下へ……	×	○	○	×	×	×
巻一						
1 蟬と蟻……	○	○	○	○	○	○
2 鳥と狐……	○	○	○	○	○	○
3 牛のように大きくなろうとした蛙……	○	○	○	○	○	○
4 二匹の騾馬……	○	○	○	○	○	○
5 狼と犬……	○	○	○	○	○	○
6 獅子と協同生活をした牝牛と牝山羊と牝羊	○	○	○	○	○	○
7 頭陀袋……	○	○	○	×	×	○
8 燕と小鳥……	○	○	○	○	○	○
9 町の鼠と田舎の鼠……	○	○	○	○	○	○
10 狼と小羊……	○	○	○	○	○	○
11 人とその影……	○	○	○	○	○	○
12 多頭の龍と多尾の龍……	○	○	○	○	×	○
13 盗賊と驢馬……	○	○	○	○	×	×
14 神々に救われたシモニデス……	○	○	○	○	×	×
15 死神と不幸な男……	○	○	○	×	○	○
16 死神と無夫……	○	○	○	○	×	○
17 中年の男と二人の恋人	○	○	○	×	×	○
18 狐と鶴……	○	○	○	○	×	○
19 子供と学校の教師……	○	○	○	×	×	○
20 雄鶏と真珠……	○	○	○	○	○	○
21 熊蜂と寄蜂……	○	○	○	×	×	○
22 樫と蘆……	○	○	○	×	×	○
巻二						
1 氣難し屋への反駁……	○	○	○	×	×	○
2 鼠の会議……	○	○	○	○	×	○
3 猿の前で狐を告訴する狼……	○	○	○	○	○	○
4 二匹の牡牛と蛙……	○	○	○	○	○	○
5 蝙蝠と二匹の鼬……	○	○	○	○	○	○
6 矢に傷いた鳥……	○	○	○	○	×	○
7 牝犬とその友……	○	○	○	○	○	○
8 鷲と甲虫……	○	○	○	○	×	○
9 獅子と蚊……	○	○	○	○	○	○
10 海綿を積んだ驢馬と塩を積んだ驢馬……	○	○	○	○	○	○
11 獅子と鼠……	○	○	○	○	○	○
12 鳩と蟻……	○	○	○	○	○	○
13 井戸に落ちた占星術者	○	○	○	×	×	○
14 兎と蛙……	○	○	○	×	×	○
15 雄鶏と狐……	○	○	○	○	○	○
16 鷲を眞似ようとした烏	○	○	○	○	○	○
17 ジュノンに訴える孔雀	○	○	○	○	○	○
18 女人になつた牝猫……	○	○	○	×	×	○
19 獅子と狩りする驢馬……	○	○	○	○	×	×
20 イソップにより説明された遺言……	○	○	○	×	×	○
巻三						
1 粉挽屋とその息子と驢馬……	○	○	○	○	○	○

六つの邦訳は前述の如く全訳でないから、約三百話が全部訳されていない。あるものは六訳があり、あるものは一つ、あるものは未だ訳されてないのがある。次に巻次の順序に話の題名をあげ、六つの邦訳がどんな話を訳しているかを表示することにする。○は訳があり、×は訳がないことを意味する。尚、この六人の外に寓話集でなく、一、二話を選んで訳した人が数人あるが、今はそれには触れないことにする。（関西大学主事）

話の題名	佐々木	中村	其他
巻七			
はしがき……	○	×	×
モンテスパン夫人へ……	○	×	×
1 ペストに罹つた動物たち……	○	○	平野
2 不幸な夫……	○	○	×
3 世間から隠遁した鼠	○	○	田中 平野
4 鷲……	○	○	田中 平野
5 娘……	○	○	平野
6 願望……	○	○	×
7 獅子の宮廷……	○	○	×
8 希臘と鳩……	○	○	×
9 乘合馬車と蠅……	○	○	田中
10 牛乳屋と牛乳の壺……	○	○	田中
11 牧師と死者……	○	○	×
12 蓮を追う男と蓮を寝て待つ男……	○	○	×
13 二羽の雄鶏……	○	○	平野
14 蓮の神に対する人間の忘恩と不正義……	○	○	×
15 女占者……	○	○	×
16 猫と鼬と小兎……	○	○	×

2 手足と胃袋……○○○○○
3 羊飼になつた狼……○○○○○
4 王様を求める蛙……○○○○○
5 狐と牡山羊……○○○○○
6 鷲と牝猪と牝猫……○○○○○
7 薛どれとその妻……○○○○○
8 痛風と蜘蛛……○○○○○
9 狼と鶴……○○○○○
10 人に打倒された獅子……○○○○○
11 狐と葡萄……○○○○○
12 白鳥と料理人……○○○○○
13 狼たちと羊たち……○○○○○
14 老いた獅子……○○○○○
15 フイロメールとプロニエ……○○○○○
61 溺死の女……○○○○○
17 納屋に入つた鼬……○○○○○
18 猫と老鼠……○○○○○

巻四

1 恋をした獅子……○○○○○
2 羊飼と海……○○○○○
3 蠅と蟻……○○○○○
4 庭つくりとその領主……○○○○○
5 騾馬と小犬……○○○○○
6 鼠と鼬の戦争……○○○○○
7 猿と海豚……○○○○○
8 人と木像……○○○○○
9 孔雀の羽根をつけた樫鳥……○○○○○
10 駱駝と水に浮ぶ棒……○○○○○
11 蛙と鼠……○○○○○
12 動物からアレクサンドルへの貢物……○○○○○
13 鹿に仕返ししようとした馬……○○○○○
14 狐と胸像……○○○○○
15 狼と山羊と小山羊……○○○○○
16 狼と母と子供……○○○○○
17 ソクラテスの言葉……○○○○○
18 老人とその子等……○○○○○
19 神の言葉と無信心者……○○○○○
20 財産を失つた守銭奴……○○○○○
21 主人の服……○○○○○
22 雲雀と子雲雀と畑の主……○○○○○

巻五

1 禮天とメルキユール……○○○○○
2 素焼と壺と鉄の壺……○○○○○
3 小魚と漁師……○○○○○
4 兎の耳……○○○○○
5 尾を切られた狐……○○○○○
6 老婆と二人の女中……○○○○○
7 牛獣神と旅人……○○○○○
8 馬と狼……○○○○○
9 農夫とその子供たち……○○○○○
10 山のお産……○○○○○
11 運命の神と少年……○○○○○
12 医者……○○○○○
13 金の卵を産む鶏……○○○○○
14 聖者の遺物を運ぶ騾馬……○○○○○
15 鹿と葡萄……○○○○○
16 蛇と鱸……○○○○○
17 兎と鵠鴒……○○○○○
18 鷲と梟……○○○○○
19 獅子の出陣……○○○○○
20 熊と二人の友……○○○○○
21 獅子の皮を着た騾馬……○○○○○

巻六

1 羊飼と獅子……○○○○○
17 蛇の頭と尻尾……○○○○○
18 月の中の動物……○○○○○

巻八

1 死と瀕死の人……○○○○○
2 靴直しと金持……○○○○○
3 獅子と狼と狐……○○○○○
4 実話の力……○○○○○
5 人間と蚤……○○○○○
6 女と祕密……○○○○○
7 主人の弁当を頭にした犬……○○○○○
8 おどけ者と魚たち……○○○○○
9 鼠と牡蠣……○○○○○
10 熊と庭園愛好者……○○○○○
11 二人の友人……○○○○○
12 豚と牝山羊と羊……○○○○○
13 テイルシスとアマラント……○○○○○
14 牝獅子の葬式……○○○○○
15 鼠と象……○○○○○
16 占星……○○○○○
17 驢馬と犬……○○○○○
18 地方総督と商人……○○○○○
19 学問の効用……○○○○○
20 ジユピターと雷……○○○○○
21 鷹と食用鶏……○○○○○
22 猫と鼠……○○○○○
23 奔流と川……○○○○○
24 教育……○○○○○
25 二匹の犬と死んだ驢馬……○○○○○
26 デモクリトスとアブデラ人……○○○○○
27 狼と獵師……○○○○○

2 獅子と猟人	○	○	○	○	○	○
3 太陽と北風	○	○	○	○	○	○
4 ジュピターと小作人	○	○	○	×	×	○
5 雄鶏と猫と仔鼠	○	○	○	○	○	○
6 狐と猿とけもの達	○	○	○	○	×	○
7 系図自慢の騾馬	○	○	○	×	×	○
8 老人と驢馬	○	○	○	○	○	○
9 水鏡を見る鹿	○	○	○	○	×	○
10 兎と亀	○	○	○	×	×	○
11 驢馬とその飼主たち	○	○	○	○	×	○
12 太陽と蛙たち	○	○	○	○	○	○
13 村男と蛇	○	○	○	○	○	○
14 病める獅子と狐	○	○	○	○	×	○
15 鳥刺しと蒼鷹と雲雀	○	○	○	×	○	○
16 馬と驢馬	○	○	○	○	○	○
17 影のために餌を失つた犬	○	○	○	×	○	○
18 泥濘にはまつた荷車の御者	○	○	○	○	○	○
19 香具師	○	○	○	×	○	○
20 不和の女神	○	○	○	×	×	○
21 若い寡婦	○	○	○	×	×	×
エピローグ	○	○	○	×	×	×

巻九

1 不実の受託者	○	×	×
2 二羽の鳩	○	×	×
3 猿と豹	○	×	×
4 団栗と南瓜	○	×	×
5 生徒と先生と庭の持主	○	×	×
6 彫像家とジュピターの彫像	○	×	×
7 娘となつた廿日鼠	○	×	×
8 智恵を賣る狂人	○	×	×
9 牡蠣と訴訟人	○	×	平野
10 狼と痩せた犬	○	×	×
11 何事にでも度を過すな	○	×	×
12 大蠟燭	○	×	×
13 ジュピターと旅人	○	×	×
14 猫と狐	○	×	×
15 夫と妻と泥棒	○	×	×
16 寶物と二人の男	○	×	×
17 猿と猫	○	×	×
18 鳶と鶯	○	×	×
19 羊飼とその羊群	○	×	×
ラ・サブリエール夫人への言葉	×	×	×
二匹の鼠と狐と卵	×	×	田中

巻十

1 人と蛇	○	×	×
2 亀と二羽の家鴨	○	×	田中
3 魚と鵜	○	×	×
4 金を埋める男とその仲間	○	×	×
5 狼と羊飼	○	×	×
6 蜘蛛と燕	×	×	×
7 鷓鴣と雄鶏	○	×	×
8 耳を切られた犬	○	×	×
9 羊飼と王様	○	×	×
10 魚と笛を吹く羊飼	○	×	×
11 二羽の鸚鵡と王様とその王子	○	×	×
12 牝獅子と牝熊	○	×	×
13 二人の冒険家と御守	○	×	×
14 ロシュフコー公爵への言葉—兎たち	×	×	×
15 商人と紳士と牧人と王子	○	×	×

巻十一

1 獅子	○	×	×
2 メーヌ公爵のために—ジュピターの子を教育しようとする神々	○	×	×
3 農夫と犬と狐	○	×	×
4 或るモゴール人の夢	○	×	×
5 獅子と猿と二匹の驢馬	○	×	×
6 狼と狐	○	×	×
7 ダニューブの農夫	○	×	×
8 老人と三人の青年	○	×	×
9 廿日鼠と梟	○	×	×
エピローグ	×	×	×

巻十二

注意	×	×	×
ブルゴーニュ公爵閣下へ	×	×	×
1 ユリシスの仲間	○	×	×
2 猫と二羽の雀	○	×	×
3 蓄財家と猿	○	×	×
4 二匹の牝山羊	○	×	×
猫と廿日鼠と題する寓話をラ・フォンテーヌに求めたブルゴーニュ公爵閣下へ	×	×	×
5 年よりの猫と若い廿日鼠	○	×	×
6 病める鹿	○	×	×
7 蝙蝠と薮と家鴨	×	×	×
8 犬と猫との喧嘩と猫と廿日鼠との喧嘩	○	×	×
9 狼と狐	○	×	×
10 蝲蛄とその娘	○	×	×
11 鷲と鵲	○	×	田中
12 鳶と王様と猟師	○	×	×
13 狐と蠅と針鼠	○	×	田中
狐と蠅	×	×	×
14 愛と狂氣	○	×	×
15 烏と羚羊と亀と鼠	○	×	×
16 森と樵夫	○	×	×
17 狐と狼と馬	○	×	×
18 狐と七面鳥の仔	○	×	×
19 猿	×	×	×
20 スキチャの哲学者	×	×	×
21 象とジュピターの猿	×	×	×
22 一人の愚者と一人の賢者	×	×	平野
23 英國の狐	×	×	×
24 ダフニスとアルシマデュール	×	×	×
25 裁判官と	×	×	×
太陽と蛙	×	×	×
鼠の同盟	×	×	×

体育五部、文化二部の部長を兼務して居られた八島教授の急逝は、シーズンを控えた各部にとつて大きな打撃である、こゝに記し盡せないが、先生の宏德に報ゆる意味からも、各部の今シーズンに於ける活躍を期待したい。

（寫眞は愛用カメラを抱いてボクシング応援中の故八島教授と次田學生課員）

軍の名に恥ぬ速攻を見せて一点を先取した、然し、二十分本学FW朝田、ゴールして対に持ち込み、CH洪を中心にHBの強力なフォローに、三十分再度、朝田のブッシュが決り決勝点を挙げて優勝した、監督天野氏の並々ならぬ努力と、チームワークの賜ものであろう、出場メンバーは、

姜　崎　藤　尾　田　井　本　部　林
堂　伊　西　朝　八　野　洪　松　白　安　小
F・W　H・B　F・B　G・K

七月二十日　本学　2——1　全東京
八月廿一日　〃　2——1　学習院大
九月　二日　〃　5——0　早大
〃　三日　〃　6——3　〃

◎**野球部**　八月初旬より練習に入つた当部は、現在、打撃は最高潮であるが、主戦投手網、山村の二君の病氣欠場は惜しまれる、幸い田畑の好調と、新人吉村工藤の活躍が予想されるので、本シーズンの優勝が期待される、予想されるメンバーは、

木村林津代田本根木島藤
佐西小大田小岡山高高近
田畑西村藤
桐田大吉工
中遊一左捕右二投三投投投投

休暇中のオープン戦は全勝であつた。

八月十七日　本学　6——4　明大定期戦
八月十九日　〃　4——2　福島日東紡
八月二十日　〃　9——5　常盤炭坑
八月廿一日　〃　7——3　東洋紡績
〃　〃　3——1　〃

九月十三日より開始された秋季リーグの第一戦は優勝候補同大であつたが、本学の猛打の前に敗退した。

九月十三日　本学　3——2　同大　西宮
九月十五日　〃　8——2　同大　〃

投手力をカバーした穴のない猛打力が物を言つた試合であつた。

◎**山岳部**　第三回夏季登山リクレーションを催した処、本夏も多数の参加者を得、OB藤田忠雄、リーダーとなり、総員二十五名、七月二十五日松本駅を出発電車、バスを利用し上高地に到着、費食後、横尾山荘まで四時間の山路を激しい夕立に見舞われながら登つて、当夜はこゝに一泊、七月二十六日午前六時横尾を出発、槍沢雪渓で費食、当日は殺生小屋に宿泊、当日は午後大雨頂上を極め、翌七月二十七日午前六時殺生小屋を出発、

西岳、大天井岳、燕岳を登破し、中房温泉に到着、こゝで三日間の疲れを休め、七月二十八日有明駅にて解散、白馬登山を希望する者を残し、一同無事元氣に帰阪した。（寫眞は赤岩頂上に於ける一行）

◎**航空部**　八月二十四日より日本学生航空連盟主催の第一回合宿を、京都府下玉水に於いて十日間実施した、四十度を超える高温度の木津川原の猛訓練は、七年間の空白狀態を取戻すに充分であつた、三日を経ずしてセコンダリーによる訓練に入り、旋回術法過程を経て、九月三日無事訓練を完了した。

参加部員と、その成績は次の通りである

下地　信夫（経四）高度十米直線
滑空
二級
滑空士　大前　幸宗（法四）高度十五米左右四十五度
〃　恒川正二郎（法四）旋回　〃
三級
滑空士　藤本　裕二（法四）　〃
松崎　安隆（法三）高度十米直線
滑空
兒玉　周郎（経二）　〃

◎**軟式野球部**　第四回全日本学生準硬式野球大会が、八月二、三、四日の三日間、北海道札幌市で挙行されたが、当部も出場、第一戦法政大学と対戦、三対二でこれを破り、第二回戦和歌山大と対戦六対〇で勝、准決勝には宿敵同志社大と対戦、前半一対〇と優勢裡に試合を進めながら後半、三点を奪われ試合は逆轉、惜しくも決勝戦を前にして破れた、帰路

北海道の実業團と対戦次の戦績であつた。

本　学　1——5　赤間炭礦
〃　　6——5　豊里炭礦

尚、九月八日より秋季リーグ戦に入り、現在、同大に一勝一敗神大に一勝一分の成績である、連覇を期待されるが、神大の一分が今後の成績に響きそうである。

◎**軟式庭球部**　七月二十一日、二日の両日、宇治山田市で、西日本学生選手権試合が挙行され、本年こそ優勝を期待され乍ら、再度、関学大に敗れ優勝を逸した。

〔同一二日勝ちんだ関西長部総方　日当は前寫〕

本　学　1——3　関学大

個人戦では、岡本、小川組が優勝、個人選手権を獲得した。

◎**レスリング部**　九月二十三日西宮体育館に於いて、秋季リーグ戦が開催され関学、同大を破り優勝、全日学生王座決定戦に出場することになつた、成績次の通り。

本学　　同大
フライ級
安川○体固め　山中×
宇賀○　〃　内波×　二分六秀
バンタム級
木村○　〃　西山×　一分十五秒
押立○　〃　松井×
フエザー級
井上×判　定　田島○　二分五十三秒
宮崎×体固め　岩野○　八分四十五秒
ライト級
清谷弟○判定　田井×　七分十四秒
清谷兄○棄権　平野×
ウエルター級
古沢○　〃　中野×
本学　　関学大
フライ級
安川×判　定　田村○
宇賀○　〃　山城×
バンタム級
木村○巻固め　伊藤×　七分十秒
押立○判　定　佐野×
フエザー級
井上×海老固め小寺○　四分十五秒
宮崎○判　定　植田×
ライト級
清谷弟○〃　三ケ尻×
清谷兄×棄権　大崎○

バンタム級の試合が山であつたが、木村勝、押立の健闘が勝敗を決した。

◎**撓競技部**　八月下旬、善通寺に合宿合宿中予備隊と対抗試合をし、六対二で勝、早大と第一回対抗試合を行い、十対三の圧倒的な差で、これも破つた、主將須鎗、深山、矢野の諸君は圧倒的な強味を見せ、不敗を誇つている、帰校後、京都に於いて同大と試合し

本　学　　同　大
和田◎小手、面　藤井××
武田◎面、面　伊藤○××小手
高本◎面、面　秋山××
矢野◎胴、胴　鵜海××
佐伯◎小手、胴　野田××
篠本○××胴　山内◎小手、胴
森田◎小手、小手、片山××
菅谷◎小手、小手、小島×○×、小手
増田◎面、小手　諏訪××
松谷○××胴　山内◎胴、面
谷××　木村◎小手、胴
渡辺◎面、面　中村××
須禽◎小手、小手、富本××

◎**二部演劇部**　八月三十一日松坂会館に於いて、当部単独公演を開催、チエホフ作「路上」一幕を上演した、スタッフは土江桂治演出、板坂、勝井装置、石田舞台監督、キャストは、奥井、阪本、小村、西村等の諸君であつた、土江の演出は、よく原作者チエホフの味を生かし破綻なく、殊にOB阪本のボルツオフの熱演は好評であつた。

◎**二部寫眞部**　八月十五日より四日間南紀熊野に撮影合宿会を行い、天候に恵まれなかつた、相当画材をカメラに納め帰つたが、十月下旬に作品として仕上げ合評会を行う予定である。

◎**二部映画研究部**　夏期休暇中、「栄光の星の下」に他、十一映画の観賞会を行い、八月二十一日、八月三十日の二回合評会を開催、毎回部員三十数名の参会を得て盛会であつた、尚、八月十六・十七日の二日間、六甲山上にリクレーションを行い、盛夏の猛暑を避けて山上に楽しい涼夜を過した。

◎**エスペラント部**　当部は、今度、日本エスペラント学会関大支部として、財團法人日本エスペラント学会より設置を承認されたので、従來のエスペラント研究部より、関大エスペラント学会と名称を替え、学会の一機構として活動することになつた。

◎**バレーボール部**　春季戦に一部昇格の機会を失なつた当部は、秋季リーグこそ一部昇格の機会と全員張切り、二部の強豪京大、市大を破り乍ら、神大に敗れ、遂に一部昇格の希望を喪つた、試合成績次の通り

九月二十一日本学　2（21 21 / 12 15）0　京大
〃　〃　2（21 21 / 13 13）0　京薬大
九月二十八日〃　0（0 0 / 21 21）2　神大
九月二十八日〃　3（23 19 21 / 21 21 14）2　大市大
九月二十八日〃　2（21 21 / 17 12）0　京工繊

コルトーに學ぶもの

アルフレッド・コルトー氏が来日して大阪で演奏会を開いたある日、コルトーを文樂へ、という朝日新聞社の依頼で私は文樂座に彼を案内した。舞台は当日の演し物「道行旅路の嫁入」、コルトーは名人文五郎の演ずる人形遣いの神技と、淨瑠璃、三絃のかもし出す一分のすきもない名演奏に、独り「セ・ボオー」を繰返して嘆賞し、舞台を見つめたまゝ、全身を耳にし、眼にしてその雰囲氣を味わつている様子であつた。幕間に文五郎氏が人形の説明をしたいからというので私は彼にその由を傳えてそれを見たらと勧めた。ところが、巨匠の返事は意外であつた。「この素晴しい舞台を見て私はミステールの裡に引入れられて何とも表現のしようもない感激で一杯だ。今そのメカニツクを拜見して折角のこの心持をこわすのは惜しいし、又恐ろしい氣がする」というのである。いわば見たくないと断わつたわけだが、私は「これは決して貴下のいわれるメカニツクではない、唯人形の内部に数本の糸があるのみで、これだけで人形をあの様に動かすデリケシーを見ても折角の貴下の心情を害するものではなかろう」と再三の説明をして漸く彼は承諾した。結局興味深く人形の説明を聞いたが、最後に、文五郎氏が無雜作に人形の首を拔いて彼に見せようとしたら、コルトーはあわてゝその手を押えて「もう結構」と止めさせた。

私は従来多くの各国有名人と知り、機会ある毎に文樂に案内したが、その殆んどの人が例外なく人形の説明を求めその内部を見たがつた、又私もいつもそうしたのであつたが、内部を見るのを恐れて断わつたのはコルトー一人きりである。始めから人形だと思つているわれわれにしても、その内部を見ると何か一つの夢を失つた様な氣がするものであるが、コルトーには仮令相手が人形とは云え、こうした美しい夢を自ら破ることはこの上もなく恐ろしい事であつたろうか。私は彼のこれらの言動に接して身のしびれる程の感動を覚えた。

純粹に真淨美を求めその中にひたりきつた人にとつて醜悪は既にそれ以前のものである。一すじにその魂ともいうべき美のためにその完璧な熟達を献げるコルトーにあつては、世に云うむづかしいテクニツクなどはそれ自体巨匠の創り出す藝術美以前のものであろう。私は彼の持つ音樂の美しさの発源をこゝに見出した氣がした。私は音樂に関しての専門家でもなく彼の如き巨匠の藝術を云々する資格を持つ批評家でもないが、コルトーが真に藝術家として高い心境にある事をこの一事からも認るにやぶさかではない。

唯美あるをのみ知つてその世界に生きその中に自らを発見し得る者は幸である。私はコルトーの如き人間的な、真に美とその夢に生きる人を羨ましく思うと共に、世俗の雜務に追われ、そのカラクリを見それにあくせくするわが身をみすぼらしく思う。総てが美に包まれた世界、虚偽と欺瞞を取去つた世界をと念願するものである。コルトーに学ぶもの、彼に接した私の氣持である。（T・M）

大学図書館随想（その二）

図書館　大山綱憲

二、大学図書館を支へるもの

現在の大学図書館は、図書館奉仕として要求される最低限度の仕事を辛じて遂行してゐるに止る。誠に残念乍ら、本は事実なのである。然るに、実現目標を最低限度に置いてすら、之を現実に、実現せんとする時、我々の前には、忽ちにして、我が行く道に立塞つて当為の実現を否定する巨大なる質量の姿が現はれる。

図書館が、とも角も、その本來の目的に向つて前進しつゝあるのは、之等の諸困難を克服しつゝある人々によつて支へられてゐるからに外ならない。

斯かる困難は、その奉仕すべき経営目的を明確に意識してゐない間は、少しも感ぜられないのであるが、一度、仕事に興味を起し、且自己の責任を感ずるに及んで、初めて忽然としてその巨大なる姿を現はすのである。そして、それはその目的意識が、明確になればなる程増大しぼやければぼやける程縮少する。之は誠に妙なもので、困難は、自由に大きくもなり、小さくもなり、又消滅さへするのである。我々は人間である以上、誰でも困難は少い方が幸いに違ひない。その困難なるものが単に目的意識――それも人格目的ならざる経営目的――をぼやかすことによつて、崩壊するとするならば、困難から逃れることは誠に易々たるものではないか。何を好んで、何等酬ひられることのない困難を自ら求める必要があらう――仕事に熱意を傾け出したが爲に困難にぶつかり始めた人々に、次に起つて來る考へは之である。

然るに、又斯かる人々が、斯かる困難を、我が行く途に見出すに至つた所以のものは、実は、その大部分が、火の後なる、静かなる細き声に耳を傾けた結果なのであるから、斯かる酬ひられざる困難から逃避せんとする欲求と、此の良心なる声に聞き入らんとする欲求とは、必然的に、人格内に於て、相剋し、それは即ち人間的苦悩となつて表はれる。図書館に在つて、僚友と仕事のことに就て話し合つてゐる時、私は数人の優れた、頼もしい人々の間に、斯かる人間的悩みが存在することを見出すのである。又時にはそれを告白されることがあるが、その時私は全く進退両難に追ひ込まれる。個人としても、公人としても。斯かる悩みは良心あるが故に当然起つたものであり、

その解消は、主として、マクロ的経営手段に之を求めなければならないのであるから。我々の力の及ぶ範囲に在るものは、唯内面的な人生観による解決のみである。斯かる困難との闘ひ、何処までも我が道を行かんとすることは、即ち人格発展の所以なのであつて、エマーソン流に考へるならば斯かる苦闘は夫自体に於て酬ひられるものなのである。如是本末究竟等と言はれる佛教哲理も、之と一脈通ずるものがある様である。之は苦悩に苦悩を重ねた人々が、最後に到達し得た結果なのであるから、多分、真理だと信じて差支ないであらう。それが果して真理であるか否かは解らないとしても、少くとも斯く信ずることによつて我々は、その小さな悩みの解決手段を見出す。実は、私も、斯かることを真理として信ずればこそ、一見馬鹿らしいと思はれることも、真面目にやつて居れるのだと言つた様なことを話すのであるが、然し、我々が、現に、時空の中に存在する人間である以上、斯かる問題を、外面的なものを無視して、唯内面的にのみ解決することは出来ないであらう。

私は、米人の間に交つて働くこと四年つぶさに、彼等の所謂アメリカン・ウエイ・オヴ・ライフなるものを観察して来たのであるが、彼等の些々たる日常生活が、如何に深く哲学に根差してゐるかを知り、驚歎した者である。彼等の哲学は、所謂プラグマティズムと言はれるもので恐らく多くの日本人が軽蔑してゐる如く常識での範囲を多く出づるものではないであらう。併し乍ら、如何に高遠なる哲学と雖も、単に研究或は論争の対象としてのみ存在する限り、我々には何の役にも立たない。又、プラグマティズムを嘲ふ大先生の中にも、その日常生活に於ては、哲学的無智なる者共と何等択ぶ処なき人物を見出す。之に反し、たとへ一つの哲学的真理と雖も、又たとへ夫が、つまらない常識の範囲を出ないことであらうとも、それが、現に行動の原動力となつてゐるのを見るとき、それが如何に多くの自己犠牲を伴ふものであるか、又その実践が如何に崇高なものであるか、更に又、それが如何に、経営を含めて社会に貢献するものであるかに感銘せざるを得ないのである。未だ二十才を幾何も越へてゐない或お嬢さんであつたが、鞠勤――それも栄轉ではなかつた――の日の迫るに従ひ、山積する仕事を処理する爲に、日に日に健康を害して行つた。私が見兼ねて、静養をすゝめた時、彼女の答はこうであつた。「グッド・ウイルこそは、私にとつて最大の資産なのです。私は健康の犠牲に於ても、之を失ひたくない」之に対する後任者の態度も亦私に感銘を與へるものであつた。彼女は、前任者の言ひ残したことを悉く、その儘信じ、その基礎の上に立つて成すべき諸々の事共を些の遲疑逡巡する様子も見せずに、安心し切つて爲して行つたのである。此の責任観と信頼感とこそは、今日の米國の繁栄を齎した最大の要素であらうと、その時つくづく感じたものであるが、之等のことが社会一般の風潮となつたのは単に彼等の内面的生活のみの所産だとはどうしても考へられないのである。その根本に於て、それを涵養し、その支へとなる外面的な歴史的条件があることを見出のすである。

新生日本の最大の歴史的課題たる日本の民主化に最大の役割を果すべき教育、その教育の成果が最も多く依存すべき図書館が、主として静かなる細き声によつて僅かに支へられて居る現狀を見る時、我々は、此の狀態の改善に最善を盡すことが、我々にとつて最大の歴史的課題であると信ずる者であるが、それは、大学図書館が、二つの世界から唯見下ろされてゐる丈では、何等の効果も無いのであつて、何を措いても、先づそれに必要なる外面的歴史的諸条件を造り出すことが先決問題であることを痛感する次第である。

大學祭日程決る　例年十月下旬挙行せられる大学祭は、本年は国体が日数繰上げになつた爲、国体終了後に挙行せられることになり、十一月二日、三日の両日行われることに決つた、十月四日、五日は、野球秋季リーグの最終日に当り、傳統の関々戦が挙行せられるが、引続いて、六日七日は、今春会場の都合で取止めになつていた文化祭を、大学祭の一連の事業として産経会館で挙行せられることに決定している。

【編集後記】

◎　燈火親しむの候、肥馬高天の候、とにかくすべてが成熟する絶好の季節、編集子もハリ切らざるを得ないときです。

◎　このときに学報局に絶大な御協力を示された八島先生の逝去はいろいろな意味に於いても惜まれるわけです。改めて哀悼の意を表し、先生の余徳を偲びたいものです。

◎　本号に諸先生、先輩各位より多くの御投稿をいたゞきながら、紙面の都合で来月号に掲載するに余儀されたことは申訳けない次第。悪しからず御了承下さい。

（O）

昭和二十七年十月十日印刷
昭和二十七年十月十五日発行

關西大學學報　第二五二號

一年誌代実費三〇〇円（送料共）

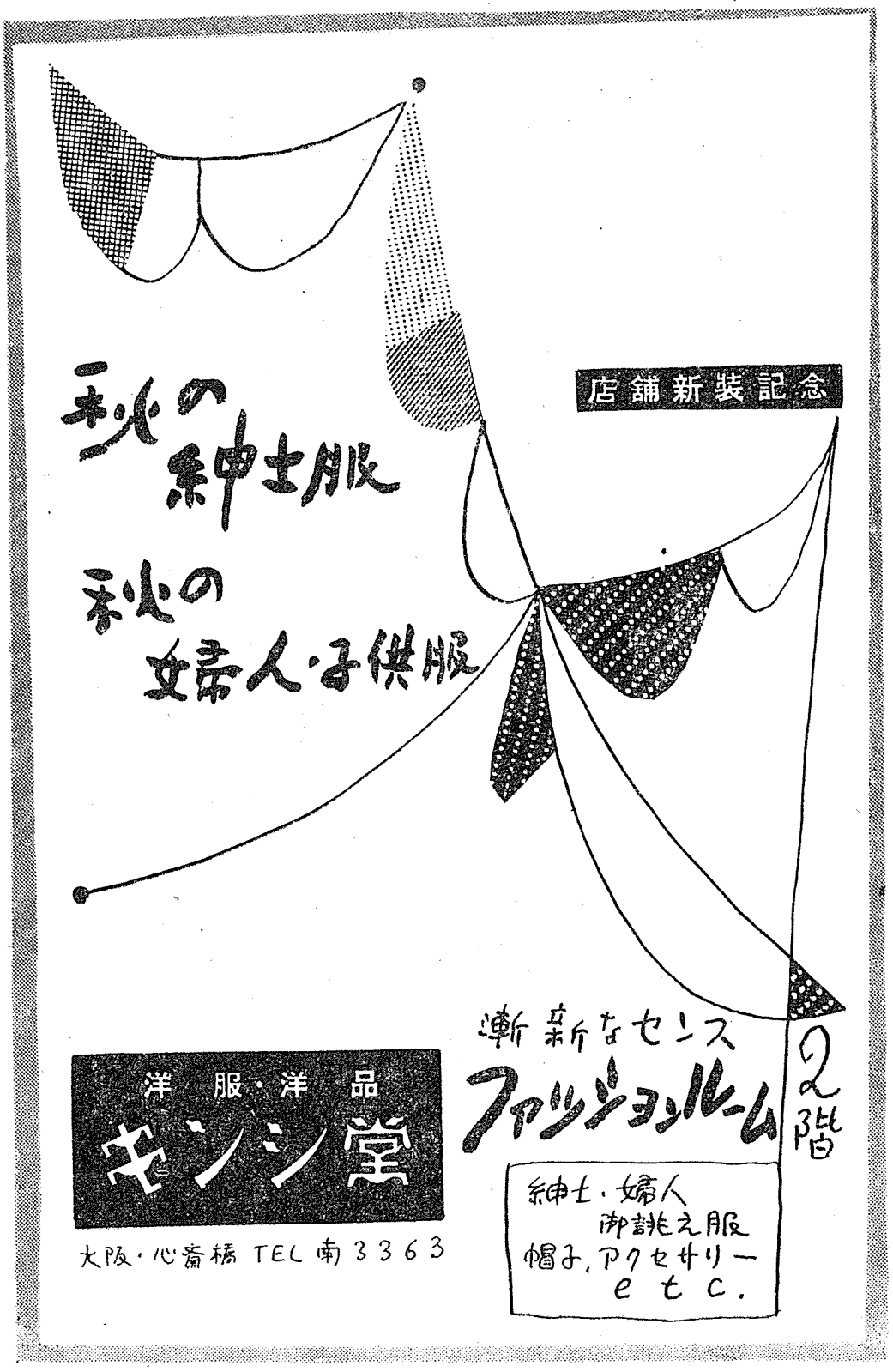
編集兼発行人　大阪市大淀區長柄中通二丁目一二番地　松生和夫

印刷者　大阪市北區川崎町七　西井幾藏

印刷所　大阪市北區川崎町七　株式会社ナニワ印刷所

発行所　大阪市大淀区長柄中通二丁目　關西大学学報局
電話堂島(35)一七五六番
振替大阪一六七七二番

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和二十七年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）

關西大學學報 第二五二號・十月號

定價三十円